

た。兼子憲治もよく試合に出たが、いつも惜しいところで負けていた。服部立夫が全関西高校フリー級選手権、秋田市で行われた全日本高校選手権大会においてフリー級に優勝した。

二十八年年度では服部立夫が全関西高校フリー選手権、関西A級選手権大会で、パンナム級選手権を、全日本高校選手権大会の兵庫予選と関西予選で優勝し、北海道で行われた全日本に決勝戦で、関東の菊池に判定負けした。服部こそはわが拳闘部中興の祖ともいべきで全国的にその名を知られ、ほとんど勝たざる試合はなかった。後進の指導にも尽くしてくれて感謝している。

二十九年年度では山野井奈々美が主将で頑張ったが優勝とまでは行かなかった。姫路で行われた全日本高校兵庫予選大会にウエルター級川村剛毅が第一位となり、秋の県下大会でも優勝し、福田が第四位であった。

(杉山)

柔道部

戦前、報国団の中に占めた柔道部の地位は非常に大きかった。戦後、本校に柔道が復帰したのは、昭和二十五年四月、当時の在校生由利英雄氏(第四回生)の熱意による同好会に端を発し、同志十名ばかりを募り、芦屋警察道場においての練習に初まる。

翌二十六年四月より、柔道部と改称、顧問小前先生(現篠山高校教諭)幹事岡本泰一、主将岡本秋彦両君(第八回生)の尽力により再発足した。前芦屋市長、猿丸吉右衛門氏(七段)現市会議員久畑幸夫氏(四段)の本校柔道部の発展成長に対する御援助、御協力は誠に大なるものがあり、感謝の他はない。

翌二十七年に至り、顧問、藤原先生を迎え武中啓市(第九回生)を幹事として、著しい進歩を見せている。殊に夏の合宿においては日本軽量級の優勝者である一ノ瀬泰勇先輩(第四回生、四段)の熱心にして厳格なる指導により、本校柔道部を軌道に乗せた功績は大なるものがある。八月下旬の近畿大会予選に西村欣祐、渡辺尚文(当時一年)岡本秋彦(当時三年)の三君は、国体近畿大会阪神地区予選に快勝、県下大会において、西村、渡辺両君は近畿大会出場権を獲得し、初陣ながら堂々二位、三位を獲得、その名を阪神地区に認められるに至った。翌二十八年、再び渡辺

は、近畿大会に出場、準優勝し、更に二十九年七月、近畿高校柔道大会個人戦に、強豪和歌山を破り優勝を遂げている。その他一般対抗試合にも成果をあげているが、なお一層の練習を必要としている。

部員一同、道場の校内設置を懇望し、実現の既は飛躍的に名を天下に馳せる日も近いであろう。本年四月より、全国的な選手であった岡本正夫六段を師範に迎え、部員も四十名を越し、主将松山政次郎(現三年)を初め有望な部員が続ぎ、着々その成果を大会にあげべく、連日芦屋警察道場において、猛練習を行っている。(津村)

### 剣道部

終戦前ミタリズム華かな頃、剣道は中学校において正課としてずいぶん旺んに行われていた。報国団の中では最もな成はなばない存在であり、県下大会にも優秀な成績をあげたことがある。戦後いわゆる武士道精神、云々で全く禁止されてしまった。しかし、それも漸次時代の流れと共に緩和され、二十八年四月本校においても、当時三年清水、二年甲斐両君を中心として同好会が作られ、翌年には剣道部として正式に発足した。

道具不足、その上、唯一の練習場たる講堂が、十三号台風で使用不能となるに及んで、ある時は屋上に、または南校舎の空地に練習場を求めるといった悪条件の下で、部員の数こそ微々たるものではあったが、大松・中西両先生の熱心なる指導の下に、忽ち三年甲斐福井、永井の三君は初段を獲得、対外試合にも善戦よく剣道部の存在を他に示した。

現在も相変らず不利な環境の下ではあるが、かえって部内の空気が意気大いになり、今後の活躍に期待出来るものがある。(楢垣)

## 書記局外局

### 図書部

一、読書クラブの誕生  
図書部の前身である「読書クラブ」は昭和二十一年、当時三年であった馬淵良俊(五回生)を中心とし、数名の熱心な読書人によって産声をあげた。

当時学校には生徒用の図書は一冊もなかったで、各自が本を持ち寄り、中継貸出しという面倒な方法をとらねばならなかった。この年十月、漸く校友会に認められ、五〇〇冊の

予算を始めて会計簿に記入した。これと期を同じくして、乾、井上両先生がそれぞれ生徒向きの書物を十数冊、また福田先生が改造社の「日本文学全集」を寄贈され生徒達に愛読された。

ところが当時壁新聞であった「校友新聞」が九月からガリ版に、二十二年十一月から活版となり、新聞は本格的に全校的活動を開始するようになったため、クラブは「新聞」と「図書」にわかれ、重点が前者に移った形になってしまった。

### 二、図書部の発足

「芦中校友会」の中の一つの力強い存在としてその歩みを続けてきた「読書クラブ」が以上のように変化したので、二十三年四月、図書部の整備と、貸出しをその本来の目的とする「図書部」が井上先生のおすすめで再発足した。総務部に加えられたものの、貸出しを行わすべき図書が全然なく(読書クラブ当時の蔵書は皆無になっていた)設備は勿論、また備品というべきものも持たない、全く白紙の状態から出発したのである。校友会より三万円を予算をもらい、まず百数十冊の図書を求め、これらを社会科準備室という、廊下の一間の小さな本箱に入れて貸出しを開始した。

十月より五種類余の雑誌の購読も始め、蔵書数も次第に増加していった。当時はこうした苦勞の多い仕事の中心になって活躍したのは河本、横山、高馬(何れも五回生)であった。

### 三、図書部の躍進

廊下の片隅に書架二つ、図書二五〇冊といふよりも貧弱であった図書室も、二十四年四月からは本階二階の元の事務室を書庫とし、その隣の一教室を閲覧室として一大発展、県より前年度末、学校設備充実費として本校に六七〇万円が支出され、その中約六十五万円が各教科の図書購入費として割当てられたことになったので、各科の先生方は連日、京、阪、神方面の書店を廻って約二五〇〇冊の図書を購入、これらをもっと図書室に搬入された。蔵書数が一躍十倍に増加、全く面目を一新した。

この四月、教員の人事交流で東伊丹高校から本校に転任して来られた山田先生を図書部顧問に戴き、茂呂英郎(七回生)が部員達を奮励して五月より、この新購入図書を整理、分類し、ラベルを貼り、捺印し、カードを書き、不馴れな手つきと、不十分な知識とではあったが一瀉千里の勢で整理を完了、六月二

十日より貸出しを開始した。また九月には御影高校で、十一月には大阪大丸で製本講習が開かれ、部員がこれに参加、製本の技術を習得して破損本の修理にも大いにつとめた。

#### 四、図書部の充実と発展

図書部が生れてここに三年、二十五年には蔵書も四千冊を突破、明るく広く、暖かい独立した図書室も出来、運営が漸く軌道に乗りかけたこの年の四月、この道の権威者である林先生を洲本高校より迎え、元図書部員であった卒業生の寺沢さんと、先輩で、当時事務室の仕事をしておられた武藤さんが相次いで司書として来られたので陣容もすっかり整った。部員も二十名を超え、女子がその半数以上を占めた。しかしこの喜びも東の間、新一年が多数入学してきたため、今までの閲覧室は取上げられ、書庫で貸出しだけを行より外仕方がなくなつた。

二期学になり、第三校舎が落成し、新校舎の二期の一室が図書室に当てられることになり、九月六日移転、今まで教官室にあった図書も多数図書室に移され、辞典類のみを接架式にした。

#### 五、独立図書館の竣工と部活動の伸展

悠っくり腰を落着ける間もなく、校内を放重ね漸次六段式になる。閲覧室の狭いのが大きな悩みであったが、図書館西側の緑蔭に、モダンなガーデンライブラリーが六月に完成、快適な読書と自習の場所が出来た。新しく十六ミリ映写機が購入され、隔月にニュースや文化映画を上映、視聴覚の分野を一段と広げると共に、名士の講演会や、先輩との座談会等を催し、広い意味における教養の向上に努める。

六月十日、十一日の両日第十回近畿学校図書館研究大会が本県で開催され、本校は高校管理部会を担当、二日間に亘り熱心な協議研究が続けられたが、この席上三河久嘉が「本校における図書部の活動」という題の下に堂々たる発表をなし、多くの先生方に深い感銘を与えたことは特筆すべき事であった。

近隣の各高書図書部との連絡も密になり、互に他校の図書館を参観して意見の交換をし部活動の向上に資すると共に、内においては「読書会」を催し修養に励んでいる。

かくてわが図書部は多くの先輩の並々ならぬ努力と先生方の良き御指導の下に、苦難にみちた歩みではあったが、しかし年々力強い発展をとり、全国にその名を知られる立派な図書館となり、自他共に許す充実した図書

派しつづけてきたわが図書部に大きな喜びの日がきた。二十六年十月、赤瓦の屋根に側面を大理石の壁面で意匠された五十坪の独立図書館の竣工を見たことこれである。新しい出納台、書架、カードケース等々諸種の備品も整備され、蔵書も充実し五千冊を突破、N・D・Cによる分類再整理をなし全面的開架の実施と相まって、ここに名実共に近隣に誇り得る近代的学校図書館としての態勢が確立した。二期学より予約制度を実施し、三期学より図書部の立体的利用法の一としてバーディ幻燈機を購入、部員の手で毎土曜の放課後の映写をなす。この頃の部員の中心は清水泰光植村久男であった。

翌二十七年より、国内、国外より観光地の資料の集収を始め、一方では隔週にレコードコンサートも行い、十月の文化祭には大がかりな展覧会を開き好評を博した。各地から先生方や生徒達が参観に見えるようになり、発展の一路を辿りつつあったこの最良の年が、突如最悪の年にならうとは……十一月四日、思いもかけぬ事故で林先生が亡くなられた事は、わが部にとって、芦高にとって限りない悲しみであった。その後をついで石田が顧問となり、幹事として服部勝彦先輩が大い

に尽力した。二十八年は図書館の内容充実と重点がおかれ、蔵書購成の検討、書架、製本用具、掲示板等の整備、館内の美化に力が注がれ、新たにミニ式六五型(五〇〇W)の幻燈機を購入レコードコンサートと相まって視聴覚教育の方面にも部員は大いに努力した。幹事として加藤純三が活躍した。



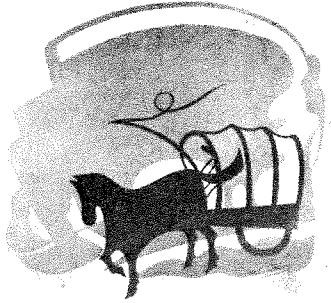
二十九年四月より新たに「図書館新聞」を発行、各教科の先生方を囀んでの座談会も計画、読書調査の実施や良書推薦等にも力を注いだ。この年度の三年部員は女子のみで、幹事の佐伯千穂を中心に大いに努力した。三十年に入り、同窓会より岩波文庫の寄贈を受け、蔵書は一万冊に近づき、書架の不足を来たしたので、今までの五段式に一段を積

部となり得たのであるが、なすべき仕事や問題は多。部員は現在三十名を超え、一同ますます張切って奉仕の精神に燃えつつ先輩の

築いて下さった基礎の上に更に一段の光を添えるべく固く心に誓っている次第である。(石田貴)

## ほろばし

第 4 号



三年三創刊した純文芸誌。四号にわたって誌上には、田隅恒生・浜田芳樹・村越英明(以上五回生)宅見晴海・藤井一美・吉田尚子(以上六回生)など、当時の芦高バルナシアン(高踏派)たちが活躍し、文芸部の「火花」とともに、芦高文芸の黄金時代を形成した。

昭和二十五年、編集部と新聞部が統合されて出版部となり、図書部・美化部とともに、書記局外局とするという自治会の機構整備(本文「自治会の確立」参照)以前、編集部の浜田芳樹(五回生)が中心となって、二十四